

2017年5月28日 礼拝メッセージ

聖書：第一列王記1章22～31節

説教：彼が私の跡を継ぐ

あらすじ

どんな時代でもどんな組織でも、リーダーの交代は最も難しい問題の一つだろうと思います。後継者をきちんと育てて、もっともよいタイミングでバトンタッチできればよいのですが、いつもうまくいくわけではありません。リーダーがなかなか引退しないために大きな問題となることもあれば、後継者が育たないままでリーダーが退いてしまい、混乱することもあります。

ダビデは老人となり、イスラエルの王としての働くことがむづかしくなってきます。リーダー交代をすべきなのですが、後継者を指名せず、いつまでもイスラエルの王座にとどまり続けます。これ見ていた息子のアドニヤは、父親に相談もせず勝手に今日から自分はイスラエルの王であると宣言し、有力な後継者候補のひとりで見られていたソロモンとその母バテ・シェバを殺そうとクーデターを起こします。

この情報をいち早くキャッチしたのは預言者ナタンです。すぐにバテ・シェバのところへ走り、ダビデ王に面会して世継ぎを指名するよう頼みなさいと助言します。バテ・シェバは助言に従ってダビデのところへ向かい、世継ぎを指名するようお願いをします。でも、それは簡単なことではありません。後で触れますが、この時代どんな事情であれ王以外の者が「世継ぎを指名してください」と言うことはできませんでした。それを破って言うのですから、王の怒りを買って殺される可能性があります。バテ・シェバは後

ろからはアドニヤにいのちを狙われています。いっぽう、目の前にはダビデがいて、場合によっては殺されるかもしれない、そんなぎりぎりの所に立たされました。それが前回までのあらすじです。

1 ナタン

1) 「王さま」 直訳「わが主、王」

助言したナタンも、バテ・シェバがどれほど危ない所を通らなければならないのか、よくわかっています。そこで自分もダビデの所に出向き、バテ・シェバを助けることにいたします。それが今日の箇所になります。23節にナタンが王の前に出て、地にひれ伏して王に礼をしたとあります。かつてナタンは、ダビデが姦淫の罪を犯したとき、王であろうとも容赦なく厳しくダビデを責め立てた人です。それが今は非常に丁寧な礼の仕方です。ダビデが怒って、間違った判断をすることのないようにナタンは身を低くしているのです。

そのナタンが24節で「王さま」と切り出しています。みなさんの聖書には米印があつて、「わが主、王」とも訳すことができると欄外に説明があります。同じことばが27節にも二回出て来ます。実は、バテ・シェバも同じことばを使っていました。いずれも直接にはダビデのことを指しているのは明らかですが、どうもそれだけでは説明ができない不思議な表現が出て来るのです。

2) 「だれが王の跡を継いで」 直訳「だれ

が彼の跡を継いで」

それは27節にある、「だれが王の跡を継いで、王さまの王座に着くのか」というところです。直訳すると、「だれが彼の跡を継いで、わが主、王の座に着くのか」となります。このなかの「彼の跡を継いで」に注目したいと思います。ナタンの前にダビデがいます。普通であれば、「だれがあなたの跡を継いで、わが主、王の座に着くのですか」と尋ねるはずですが、ところが、目の前に本人がいるのに、「あなた」とは言わず「彼」と言っている。不思議です。ダビデがあまりに偉いので、「あなた」と直接言えなかったということでしょうか。

確かに日本語ではそういうことがあります。目の前にいる天皇に向かって「あなた」と呼びかけることはできません。代わりに「陛下」と言わなければならない。それに似ています。でももしそうなら、矛盾が生じます。ナタンが「このしもべ」と言っているところの直訳は「あなたのしもべ」です。明らかにここでは「あなた」を使っています。それなのになぜナタンは「彼の跡」と言うのでしょうか。

3)ダビデの向こう側におられる主に語りかける

バテ・シェバもそうでしたが、ナタンもいのちがけでダビデの前に立っていることを思いだしてください。そんなとき人は何を考えるのでしょうか。例えば家族が重い病気になり、これから難しい手術に臨もうとするとき、どんなことばをかけるでしょうか。病室で手術前の麻酔がかけられ意識がなくなっていくまでの数分間。「がんばってね。祈っているから。」そんなことばを発するとき、

私たちは神を意識しないでしょうか。普段神のことなど忘れていても、心のどこかで「神さま、助けてください」と祈らないでしょうか。

ナタンは、ソロモンやバテ・シェバのことだけでなく、イスラエルの救いのことを思うとき、どんなに危険なことであっても、ダビデに言うべきことを言わなければなりません。それは祈りながらということになるでしょう。それで何度も「わが主、王」と繰り返します。ナタンは、ダビデの向こう側に神を見ています。ダビデではなく神に向かって語りかけるのですから、「彼の跡」ということばが出てくるのは自然なことだったので

2 ダビデ

1) ふりかかる苦難

ダビデは、バテ・シェバとナタンに説得され、ここに至って初めてことの重大さに気がつきました。あんなにかわいがっていた四男のアドニヤが父にそむいたと聞き、ショックを受けたでしょう。でもダビデはそこにとどまることなく神を思い起こしてこう告白します。29節。「私のいのちをあらゆる苦難から救いだしてくださった主は生きておられる。」

さすがダビデ。老人となっても息子にそむかれても信仰は揺るがなかった。そう見えるかも知れません。でもダビデだって弱いのです。こんな大変なときにダビデがなぜ神を思い起こす事ができたのかと考えます。信仰によって、でしょうか。でもダビデがそんなに強い人とは思えません。バテ・シェバもナタンも神の前に立って、いのちをかけて救いを祈っている。その姿を見たからではないで

しょうか。神はへりくだるバテ・シェバとナタンを通して、ダビデに対して正しく判断するようにと励ましていきます。

2) ソロモンが私の跡を継ぐ

その励ましを受けながらダビデはこう言います。30節。「私がイスラエルの神、主にかけて、『必ず、あなたの子ソロモンが私の跡を継いで王となる。彼が私に代わって王座に着く』と言ってあなたに誓ったとおり、きょう、必ずそのとおりにしよう。」

ダビデの口から、ソロモンが世継ぎとなることが初めて公に宣言されました。ことばのとおり、この後すぐにソロモンが王となるための準備が進められ、ソロモンが王の座につきま。アドニヤの企てたは押しとどめられ、混乱は収束していきます。めでたしめでたしです。

3) 死を受け入れる

しかし喜んでばかりいられません。ダビデのことを考えます。ソロモンに王座をゆずり、ダビデもこれでやっとな王という職責を離れこれから穏やかに余生を過ごせると、私たちは思うかもしれませんが、しかし、そんな単純なことではありません。イスラエルの王さまは、この後、何代にもわたって続いていきます。列王記にはそれらの記録が記されています。彼らはどんなタイミングで王の座を次の代に渡したか。調べてみるとほぼ全員が、先代の王さまが亡くなってから世継ぎが次の王座に着く。そういう順番になっています。王座を譲るということは、自分が死ぬのと同じなのです。ですから「世継ぎを教えてください」言ったバテ・シェバとナタンは、ダビデに向かって「死んでください」と言ったの

も同然だったのです。最初に、バテ・シェバが言うてはいけなことを口にしたというのはそのことです。

ダビデは、そのことばを受け入れていきます。ソロモンが救われるためにバテ・シェバが救われるために、イスラエルが救われるために、ダビデは自分が死ぬことを受け入れていきました。そうしてソロモンを指名します。

3 バテ・シェバ

1) 「いつまでも生きておられますように」

これを聞いてバテ・シェバは、はつきりと救いを確信し、31節でこう言います。「わが君、ダビデ王さま。いつまでも生きておられますように。」

日本の君が代では天皇のいのちがいつまでも続くようにと歌います。イギリス国歌にも「高貴なる女王陛下が長く生きられますように」という歌詞があります。ダビデが高齢で長く生きられないことは誰の目にも明らかなのに、王さまに対する決まり文句として言ったのでしょうか。

バテ・シェバがいのちをかけて救いを求め、その救いの約束が告げられた瞬間です。お世辞や社交辞令を語るときではありません。むしろ真実を語っていると考えるべきです。いったい何を語ったのか。最後に見ていきます。

2) 直訳「わが主、王であるダビデよ。永遠に生きておられますように。」

バテ・シェバがダビデに語るときもナタンが語るときも、この二人は「わが主、王」と繰り返していました。それはまるでダビデの向こうにおられる神に語りかけているようだと感じました。ここでもそうなのです。31

節を直訳します。「わが主、王であるダビデよ。永遠に生きておられますように。」

バテ・シェバは、ダビデが自分たちを救うために王としてのいのちを捨ててくださったことを、今日の前で目撃しました。ダビデの姿を通して、救い主が見えてきました。ここで大きな変化が起きます。これまでダビデと呼び、「わが主、王」と別々の存在であるかのように分けて呼んでいました。ところが、ここで初めて「わが主、王」とダビデはあたかも一つのものであるかのように呼びかけます。ダビデが神となったということではありません。ダビデがいのちを捨てる覚悟をしたとき、主イエス・キリストの姿とダビデとが重なっていった。そういうことです。

バテ・シェバは言いました。「いつまでも生きておられますように。」社交辞令ではありません。救い主は十字架でいのちをお捨てになりながら、永遠のいのちを与える方であることを告白しています。ダビデのすえとして救い主が来られることを告白していきます。

今日は午後から一年に一度の信徒総会が開かれます。2017年度の表題聖句としてヨハネの福音書11章40節を掲げました。「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか。」

これは病気で死んだラザロを墓に葬り、悲しんでいるマルタにイエスが語ったことばです。この後イエスは、墓の前で「ラザロよ出て来なさい」と叫び、ラザロを取り戻します。ラザロを取り戻すために主は何をされたのですか。王であるイエスが十字架の上で死んでくださいました。そして三日目によみがえってくださいました。信じる者は決して死

では終わらないことを、ご自身のからだをとおして示してくださいました。

マルタもそうであったように、バテ・シェバもダビデの姿から神の栄光を必ず見ることができると信じました。私たちにも、「きょう、必ずそのとおりにしよう」と約束してくださる主の御名をあがめて歩んでまいります。